

アトミズムの東西(二)

——古代中国に原子論は存在したか——

山口 惠 三

第一章 墨経に於ける「端」の概念に就て(承前)

(3) 無限分割の否定

前節で見たやうに『墨経』中の「端」の概念は様々に捉へられてをり、あたかも解説者の数だけ解釈が存在するかのやうな観を呈してゐるのであるが、かかる解釈の混乱を個々の解説者の恣意や資料の不備に帰せしめることは悉く誤りである。また、さうした資料の不足を時代精神や社会状況の分析によつて安易に補はうとする態度も厳に戒めなければならぬ。我々に与へられてゐるのは、如何に錯簡に満ちてゐるにもせよ、第一次資料としてのテキストなのであつて、テキストと直接には無関係な社会的、経済的、もしくは心理的状況の考察を以てテキストの解説に替へることが許されないのは云ふまでもない。さうした考察はテキストの解説の後に行はれるべきものであつて、それらをテキストの解釈に混入せし

めるならばテキストそれ自体をあらぬ姿に変へてしまふ恐れがある。我々が方法論上採るべき途は、末木剛博氏が「純粹内部分析」³⁶⁾あるいは「純粹原典主義」³⁷⁾と命名してゐるものに他ならない。

王謙説の直接の根拠となつた「経下」60およびその「経説」³⁸⁾が原子論であるか否かの判断そのものは暫く措くとして、その主張するところが無限分割の否定にあることは論を俟たないであらう。では、ここで否定されてゐる無限分割とは具体的に何なのであらうか。前節で見たやうな「端」の概念をめぐる解釈の混乱を解消するためには、先づこの問題に應へておかなくてはならない。

この箇所が『莊子』天下篇に弁者(公孫董)の説として記されてゐる「一尺之棰、日取其半、萬世不竭」³⁹⁾(一尺の杖も毎日その半分づつを取つていけば、永遠に尽きることがない。)といふ主張に対する反論であることは、フォルケを除く大多

象化された思弁でも純粹に幾何学的な思考でもなく、あくまでも具体的な物体の分割であるといふ点にこそ問題の鍵が隠されてゐる。⁽⁵¹⁾ 前節で見たやうに、譚戒甫は「経下」60を現代語に訳するに際して、原文にはない「木片」といふ言葉を補つてゐたが、それが正当であることは以上のやうな理由からも明かである。「端」概念の解明にとつて重要なことは、それが単に無限分割論の反措定であるといふのみならず、同時に具体的な物体の無限分割否定であるといふことである。⁽⁵²⁾ つまりこの概念は、物体の「無限分割の」否定である点に於て幾何学的であり、「物体の」無限分割の否定である点に於て自然学的であるといふことができる。従つて「端」の概念はかかる二面性に於て捉へられねばならない。次にこの点を考へることにする。

(4) 「端」概念の二面性

以上で「端」の概念が幾何学的側面と自然学的側面を併せ持つてゐるといふことが、何程か示唆されたかと思ふが、従来この「端」の二面性が全く問題にされなかつた訳ではない。これに或る程度気付いてゐたのはフォルケであつたと想はれる。勿論、フォルケが「端」を幾何学的点と結論してゐることは既に見たとほりであるが、「経下」60に直接言及してゐる次のやうな箇所には、フォルケ自身の困惑が透見出来

るやうに想はれるのである。

Eine Spitze oder ein Punkt ist für uns die kleinste Fläche. Ein Punkt läßt sich nicht mehr halbieren oder zerteilen. Aus dem unzerteilbaren Punkte hat sich der Begriff des Atoms entwickelt. Hui-tse hat diesen Begriff und nennt ihn das unendlich Kleine oder die kleine Einheit. Aber seine Atome haben überhaupt keinen Inhalt mehr und sind mathematische Punkte.⁽⁵³⁾

〔「先端」もしくは「点」なるものは極微の大きさといふことである。点は、もはや二分することも細分することも出来ない。かかる分割不可能な点といふ考へから原子の概念が開するのである。かうした概念を有してゐたのは恵子（恵子は恵施の尊称。訳者註。）であり、それを無限に小さいもの〔至小〕のこと。訳者註。〕あるいは極微の統一体〔小一〕は概ねそれ以上の内容は無く、数学的 point でしかない。〕

奇妙なことにフォルケは『莊子』天下篇に言及しながら、公孫竜の説には触れず恵施の説を紹介し、これを「経下」60の源泉として扱つてゐる。⁽⁵⁴⁾ この箇所の原文は、「至大無外謂

之大一、至小無内謂之小一⁵⁶（無限に大きいものは、それに含まれないものがないので、大いなる一者と呼び、無限に小さいものは、それが含むものがないので小なる一者と呼ぶ。）であるが、フォルケはこの後半部のみを引用して「経下」60と関連付けたのである。この箇所が無限大と無限小といふ対概念を述べたものであることは措くとしても、この箇所だけを引用する根拠は些か薄弱であると云はねばならない。ここに存るのは、フォルケ自身認めてゐるやうに数学的な無限小の概念であつて、「経下」60に見られる「分割」といふ契機は皆無だからである。なほ、末木剛博氏は、前半部を現代数学でいふ真無限の概念の素朴な表現であると解釈してゐる。⁵⁷

このやうにフォルケの引用には、やや不適切な面があるが、「端」概念の二面性を指示し得たといふ意味では極めて貴重な言及である。ただ、フォルケは「経下」60の源泉として性急にも恵施の無限小の概念を挙げ、公孫竜の説を顧みなかつたために、「経下」60とその「経説」が、無限分割論の反措定として現れてゐることも、それが具体的な物体の分割であることも十分には理解できなかつた。そのため叙述の仕方にもやや曖昧な点があり、Eine Spitze oder ein Punkt（「先端」もしくは「点」といふ表現もフォルケの場合、前者がAtomで後者が幾何学的点である、と明言してゐる訳ではない。

「端」概念の二面性をフォルケよりも更に明確に指摘した

のは方孝博氏であつた。方氏は、「端」概念を「経上」61とその「経説」に就て次のやうに述べてゐる。

「端」には異つた二つの意味がある。すなはち、（一）幾何学で云ふ「点」に相当するもの、そして（二）或る物体の最先端もしくは一本の線の両端、である。この二つの意味するところは異つてゐるが、相互に密接な関連を有してゐる。⁵⁸

方氏の場合も全く曖昧な点がなくなつた訳ではないが、フォルケが気付きかけてゐた問題が、かなり整理されてゐると云つてよからう。だが、方氏が「端」の二面性を認めてゐるのは「経上」61に関してだけであつて、「経下」60とその「経説」に就ては、「端」を幾何学的であると明言してゐる。

「端」とは幾何学的点に相当するものである。先に第十条（「経上」61に就て述べた箇所。訳者註。）ですでに「端」の定義に就ては論述したが、点は図形を構成する最も基本的な要素であるために、更に一步進んだ厳密な考察を俟つて始めて、本当に正確な概念を確立することが出来る。第十条ではそれはまだ不十分であつたので、この第十九条（「経下」60を指す。訳者註。）でまた別の角度から「点」の本質を説明したのである。⁵⁹

このやうに方氏は「経下」60に於ては、曖昧であつた幾何学的点の概念が明確にされたと考へ、それが純粹に数学的な概念である以上これを「原子」と考へることにほは些か無理がある」として王謙氏等の説を暗に批判してゐる。「端」を結局のところ幾何学的点と結論したといふ点では、方氏もフォルケの轍を踏んだものと云へよう。

このやうに従来の研究がアポリアに陥つてゐたのは、「端」を幾何学的点か自然学的アトムかの孰れかに決定せざるば止まずとする近代的な先入観に因るものであつたと云はねばならない。これまで見て来たやうに「端」そのものが両方の要素を具へてゐることが自明であるにもかかはらず、或る者は幾何学的点としての、また或る者は自然学的アトムとしての要素を強調して来たのである。さうした見方は、古代人と近代人との距離を忘れてゐるといふだけでなく、すでに述べたやうに古代中国の戦国末期の思想集団がユークリッドの『原論』(Στοιχειά, *Elementa*)に匹敵し得る思维体系を有してゐなかつたといふ単純な事実を見落してゐる。「端」概念のかかる二面性をギリシアの思想圏に索めるならば、初期ピュタゴラス学派の「一」の二面性との類縁を指摘することが出来る。それに就てはアリストテレスの証言があるが、彼等が万物の根拠と考へた「数」は抽象化を経た数、すなはちアリストテレスが「数学的数」*μαθηματικός ἀριθμός* もしくは

「数論的数」*ἀριθμητικός ἀριθμός* と名付けたものではなく、空間的な大きさの観念を脱してゐないアトムのな「数」であつた。アリストテレスはこれを「物体的数」*σωματικός ἀριθμός* と呼んだが、これは『墨経』に於ける「端」の概念と殆ど同じものであると云へよう。

初期ピュタゴラス学派のかかる数観念を鈴木照雄氏は「数学的なものへの自然哲学的なものの混入、自然哲学的なものによる数学的なものの混濁化」と呼んだが、それはそのまま『墨経』に於ける「端」の概念にも妥当すると云ふことができる。尤も、ここで注意しなければならないのは、初期ピュタゴラス学派と後期墨家思想集団といふ二つの学団の共通性は、あくまでもこの点に就てだけなのであつて、古代に於ける観念の未分化といふ現象に於ける共通性を拡大解釈することがあつてはならないといふことである。といふのはそもそも初期ピュタゴラス学派の「数的一」はミレトス学派に象徴される万物の「始源」*ἀρχή*への問ひと不可分のものだからである。かかるアルケーへの問ひに於てギリシア的思维方法が他の文化圏の思想には見られない特長を有し得たことを明確に示したのは、やはりニーチェであつたらう。ニーチェは「ピュタゴラスを中国人の間に立たせる」やうな価値の相対化に対して鋭い警告を發してゐる。『墨経』に於ても「端」はすでに冒頭に置かれてゐるではないか、と云はれるかも知

れない。確かに現存のテクストでは「端」は「経説」上⁷¹に現れてはゐる。しかしそれに特殊な意味を見出し得るかといふ点に就ては、高田淳氏も慎重な態度を取つてゐる。墨家に高度な数理的思考が存したことは疑ひもないが、それが始源への「問ひ」と直結しなかつたところにピュタゴラス学派との決定的な相違がある。我々は安易に「ピュタゴラスを中国人の間に立たせ」てはならないのである。

(5) 結論

「経下」60とその「経説」が、今まで見て来たやうなものであれば、我々は方孝博氏とは全く別の理由から、「端」をレウキッポスやデモクリトスの主張したやうな意味での原子である等と云へないことは、多言を要しないであらう。すでに触れたやうに「経上」39、40には時空の觀念が現れてゐるが、それらは「経下」60と内的関連を有してゐるとは認め難いものであつた。『墨経』に於ける「端」が、ギリシアのアトミズムにとつて重要であつた物体の運動も生成や消滅の問題も内包してゐないのはここに理由がある。ギリシアのアトミズムに於ては、「原子」は単に *átomou sómatos* 等といふ原義どほりの呼称の他に、その内包する意味の多様性に依じて、*kenon* (空虚) の対概念としての *to kákos* (充塞せるもの)⁷²とか、あるいは *ta arizeta* (要素)⁷³とか *ta oxhura* (様々

の形態)⁷⁴とか種々使ひ分けられたのに比して、「端」の概念は他の語によつて云ひ替へられることはなかつた。更には、「不可分なもの」といふ語にしてもレウキッポスやデモクリトスに於ては、中性形の *to trionon* と女性形の *η trionon* との意味の差異が指摘されてをり、さうした意味の細分化も『墨経』の与り知らぬことであつた。エピクロスの後継者ルクレティウスに至つては、韻律その他の理由があるとはいへ「原子」を示す語は、*materies* (素材)・*primordia* (初原)・*genitalia corpora* (産体)・*semina* (種子)・*elementa* (要素)・*principia* (元素)・*corpora* (物質) 等多種多様である。勿論、語彙と概念とは明確に区別されねばならず、語彙の多寡が直ちに概念の如何を決定する訳ではないが、この一事を以てしても「端」が、ギリシアのアトミズムの有してゐた多彩な思弁や問題意識に比肩すべくもないことは明白であらう。

哲学史を単純に唯物論と觀念論との闘争史観で捉へる者にとつては、儒家によつて抹殺された墨家をプラトンやアリストテレスによつて抹殺されたアトミストと比較することは魅力あることであらう。勿論、郭沫若のやうな異論もあるが、中国哲学史に於ける墨家を総じてその意味で肯定的に捉へた代表者は馮友蘭であつた。それに類似した闘争史観を西洋哲学史に於て示した典型はヴィンデルバントであつたらう。尤も、ヴィンデルバントの場合には、デモクリトスの唯物論と

プラトンの観念論との総合者としてアリストテレスが考へられてをり、馮友蘭ほど単純ではないが、かかる図式から古代ギリシアのアトミスト達に一種の「時代の先駆者」としての地位を与へる立場が現れても不思議ではない。それと同じやうな思想集団を古代中国に認めようとする意図が、「端」を原子であるとする主張に連なる可能性もあるであらうし、より素朴なナシヨナリズムがそこになかつたとはいへないであらう。

孰れにせよ、「端」を原子であることは到底認められないが、すでに見たやうにアトミスト達よりも寧ろ初期ピユタゴラス学派との類縁が目撃出来ることは確かである。

註 第一章(承前)

- (36) 末木剛博『西田幾多郎—その哲学体系—』(春秋社、一九八三年)四頁。
- (37) 末木剛博『西田理解の方法と矛盾概念の解釈——矛盾的自己同一の無矛盾的理解——』(『思想』第七三二号、岩波書店、一九八五年)四十八頁。
- (38) 「経下」とその「経説」が、時間的にも同時に作成されたものであるといふ点に就ては、高田淳「墨経の思想—経下・経説下について—」(東京女子大学論集第十五卷一号、一九六四年)(今後「墨経(下)」と略記する。)三頁参照。
- (39) 『莊子』(晋郭象注、台湾中華書局、一九八〇年)第十卷二

十三頁。(今後「莊子」郭注と略記する。)

(40) 以下に主要なものを列挙する。

- 孫詒讓『墨子閒詁』(世界書局版、一九七六年)二二九頁。
- 梁啟超『墨經校釋』(上海商務院書館、一九三三年)八十六頁。
- 李漁叔『墨辯新注』(台湾商務院書館、一九六九年)一九九頁。
- 陳癸森『墨辯研究』(台湾學生書局、一九七八年)二四三頁。
- 王冬珍『墨学新探』(世界書局、一九八一年)四九四頁。
- 方孝博『墨經中的数学和物理学』(中国社会科学出版社、一九八三年)二十七頁。
- (41) 『發微』七十七頁。
- (42) 王冬珍前掲書、四五〇頁。
- (43) Eucl. *Elementa*, Liber I.
- (44) 『發微』七十七頁。
- (45) Forke, A., *Me Ti des Sozialethikers und seiner Schüler philosophische Werke*. Kommissionsverlag der Vereinigung wissenschaftlicher Verleger, Berlin, 1922. S. 418.
- (46) 『發微』七十四頁。
- (47) 高田淳「墨経の思想—経上・経説上について—」(学習院大学文学部研究年報10、一九六四年)(今後「墨経(上)」と略記する。)十一頁。
- (48) 末木剛博『東洋の合理思想』(講談社、一九七〇年)二四三頁。
- (49) 鈴木照雄「前ソクラテス期のギリシア哲学における『不可分なもの』」(『ギリシア思想論攷』二玄社、一九八二年)三頁参照。
- (50) 末木、一九七〇年、二五二頁。cf. Needham, J., *ibid.* p. 92.
- (51) 高田淳「墨経(下)」二六頁。

